

ヨーロッパの歩道

大橋 昭一

観光フォーラム

ヨーロッパの歩道

Footpath in Europe

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

ヨーロッパの市街を歩いていて、まず、目につくことは、歩道が実に完備されていることである。ごく狭い、自動車が1台しか通れないような路地や小道でも、必ずといっていいほど歩道がある。写真1は、フランス・ボルドーの住宅街の細い路地であるが、こんな狭い道路でも両側に人間一人が通れるような歩道がある。市街地では、歩道のない道はまずないといっても過言ではない。

ヨーロッパの歩道で最大の圧巻は、多分、ポンペイの遺跡に残っているものである。写真2、3でおわかりのように、道全体が石畳でできており、中央に車道がある。車道といっても、小さな荷車や客車、例えば日本でも最近まで見かけた大八車程度のものが通れるだけのもので、その幅も荷車1台ぐらいのものであるが、その横に石で一段高い歩道ができてい

る。歩道は、人間1～2人ぐらいが通れるもので、車道とくらべると低い所で高さ20～30センチ、高いところでは高さ50センチぐらいのものになっている。もちろん石積み式である。車道から高いものでは、四つ辻などにある横断歩道用の所では、車道の真ん中に、車輪の進行に邪魔にならないように飛び石が置いてあるという、念の入れ方である。

ポンペイは、西暦79年8月24日の近くの火山、ヴェスヴィオ山の大噴火で突然そのまま埋もれた。1748年ようやく発掘が始まり、当時の全貌が明らかになってきたものである。ポンペイは紀元前4世紀ころから繁栄した街であるが、当時は、



写真1：ボルドーの中心部の路地

日本では弥生時代といわれるころである。そのころにこうした石畳の道路があったこと自体全くの驚きであるが、その道路にはしっかりと歩道が付いていたのである。

日本では、市街地の道路で歩道が作られるようになったのは、比較的最近のことである。大都市の中心道路では、第二次世界大戦以前から歩道のあったところがあるが、ごく最近まで、歩道のある道は、どちらかといえば例外的なものであった。現在でも、都市の道路で歩道のないものがいくらかもある。どちらかといえば、それが普通の姿である。

ポンペイの道路を歩いていてさらに驚かされることは、車



写真2・3：ポンペイの道路：中心部が車道で轍の跡が擦り減っている。歩道は石積みで一段高い。



写真4：パリ・シャンゼリゼ大通り車道、一番奥に凱旋門が見える。



写真5：パリ・シャンゼリゼ大通り歩道

道用の石畳で、車輪の通っていた跡が車輪の幅だけ擦り減っていることである。荷車などがなんども通って、轍の部分だけ石が擦り減ったのだ。石の上に轍の跡があればほど残るのには、どれほどの年数がかかったのであろうか。ポンペイがいかに栄え、賑わったかがこれからわかるが、あれだけ擦り減るにはかなりの年数がかかったと思う。石畳にあれだけの轍の跡が残っていることをみると、これらの歩道付きの道路ができたのは、噴火で埋もれるかなり以前の、紀元前のころであったはずである。

当時の道路はどのようなものであったのであろうか。貨幣等を発明し、活発な経済活動をしたことで有名な、紀元前4000年ごろのシュメール人は、車輪 (wheel) も発明し、車による交通・輸送を発展させたことでも知られている。その道路には車道と歩道があったことであろう (注1)。記録によると、紀元前2000年ごろ、すでに carriage road があった。当時書かれたメソポタミアのシュルギ王 (King Shulgi) の記録には、歩道 (footpaths) という言葉があり、王がそれを拡張したという記事がある (注1)。ポンペイにあれほど立派な歩道があっても不思議ではない。

現代の話に戻ると、パリに行かれた方は、中心通りのシャンゼリゼ大通りの歩道の広さにびっくりさせられるだろう。シャンゼリゼ大通り (写真4, 5) は、道路自体が広い。車道は片側だけで5車線ほどある。しかし、歩道も広い。車道と同じほどの広さがある。片側だけでも5車線ほどの広さである。その一部が、所によると屋外のオープンカフェとなったりしてい

るが、そんな所でも歩道の狭さを感じない。写真6は、同じくパリのパンテオンの前の歩道である。ここでもこんなに広い。

これに対し日本では、明治時代まで旅の基本は「歩くこと」(walking) であった (注2)。アメリカのゲルドナー／リッチーのいうように、人間歩行者や動物には小道 (track) で充分であるが、車の乗り物 (vehicle) には道路 (road) が必要であるという見解によれば (注1)、日本では車道と歩道を区別する観念はなかったのである。そればかりか、その昔、日本の終戦とともに進駐してきた連合国軍最高司令長官のマッカーサー元帥は、進駐後、日本の道路は、とても道路とはいえないものばかりだと、あきれたように言ったそうである。当時の日本では道路は砂利道が普通で、舗装道路は大都市でも中心部ぐらいしかなかったから、マッカーサー氏にそう言われたのもやむをえないところであった。当時の日本の道路事情は、今の日本からみると信じられないような、単に道があるだけといったようなものであった。

今の日本では、道路はほとんどすべて舗装され立派なものとなっているが、市街地でも歩道があるのは、最近できた広い道路だけである。なにしろ車社会であるから、とにかく車が快適に通行できることが第一の課題なのであろう。

それで、最近、夢想していることがある。いずれあの世に行ったら、是非、マッカーサー氏に会い、日本の道路が悪いと言われたのは、歩道のある道路が少ないことまで意識したものであったのか、聞いてみたい、ということである。

注1: Goeldner, C.R./Ritchie, J.R.B., *Tourism: Principles, Practices, Philosophies*, 10th ed., Hoboken: John Wiley & Sons, 2006, pp.40-43.

注2: Guichard-Anguis, S./Moon, O. (eds.), *Japanese Tourism and Travel Culture*, London: Routledge, 2009, p.5.

受付日 2010年10月6日

受理日 2010年11月11日



写真6：パリ・パンテオン前の歩道